

真夏の夜空に咲く大輪1万発!

第30回「盛岡花火の祭典」



特集

今年で30回を迎える「盛岡花火の祭典」。夏の一大イベントとして広く周知されていますが、そのはじまりは、都南村観光協会が中心となって行った地域の夏祭りでした。地元有志の熱い想いと工夫で続けてきた歴史を振り返ります。

打ち上げ前イベントの郷土芸能も、来場者にとって楽しみの一つ

わずか104発からのスタート

毎年8月、盛岡の夜空を彩る美しい花火。1万発にも及ぶ連発花火や仕掛け花火は、多くの人を魅了します。都南大橋で行われる「盛岡花火の祭典」がはじまったのは、昭和53年のこと。当時の都南村は人口が増え続けていた時期で、湯沢に宅地造成が進んでいました。そこで、そろそろ夏まつりをやろうという話を持ちあがったのがきっかけです。ちょうど、同年に第1回「盛岡さんさ踊り」が開催され、「地元でも何か新しいことをやりたい」という思いで、都南村観光協会が中心となって準備を進め「都南花火大会」がはじまったのです。

当初は、都南村の村議会に予算を組んでもらい、わずか104発の花火打ち上げによるスタートでした。その後、夏祭りは継続しましたが、花火大会は第3回のあと諸事情によって休止。昭和63年、7年ぶりに再開されます。その背景には、地元有志による積極的な働きかけがあったとのこと。「盛岡花火の祭典実行委員会」の副委員長・高橋善躬さんは、当時から都南村商工会の役員として深く夏祭りに関わっていたそうです。



「花火の魅力は、爆音体感の素晴らしさ」と話す高橋さん

「昭和62年に、ちょうどタイミングを合わせたかのように、都南大橋が完成。再開させるにはエネルギーも資金も必要でしたが、皆、熱い思いがあり、役場側も企業や個人に対して協賛金をお願いするようになりました。」

以降、年々規模を拡大しながら地元住民に親しまれていったのです。

万全な警備体制で臨む

平成4年、盛岡市都南村合併に伴って都南商工会へと事務局が移行。さらに平成17年に盛岡商工会議所との合併によって、大会は「盛岡花火の祭典実行委員会」が運営する形となりました。運営スタッフも、限られた予算のなかで、いかに質の良い花火を選ぶかにこだわり、継続と共に打ち上げ本数も増加。一方で、平成13年に発生した兵庫県明石市で花火観客死傷事故以降、警備の取り締



盛岡さんさ踊り 8月1・2・3・4日開催(会場/盛岡市中央通)

まりは厳しくなり、安全性重視に一層目を配るようになったのだとか。現在は、消防署や警備にあたる警察官などを含めて、総勢500人体制で運営にあたっています。

「規模の拡大によって、花火の打ち上げではなく事故のない運営にかかる費用も必要になっていきます。しかし、無事故で30回を迎えられたのはうれしいこと。今年も気を引き締めながら対応したい」。

そう高橋さんは話します。

地域の伝統芸能を盛り込む

「盛岡花火の祭典」の来場者数を正確に把握することは困難ですが、都南地区の在住者約4万人、入場券販

売分は約1万人、自由席や通り沿いの観客を加え、来場者は6万から6万5千人と発表されています。開催当日の混雑を緩和する目的も兼ね、力を入れているのが平成19年頃から復活した打ち上げ前イベント。打ち上げ前の早期来場を促すだけでなく、来場者にとっても、津軽三味線、三本柳さんさ、黒川さんさなど、地域に息づく伝統芸能に触れる貴重な機会です。平成22年から参加している盛岡市指定民族文化財「下永井獅子踊り」に出演する大志田恒雄さんは、その意義をこう話します。

「私が『下永井獅子踊り』に関わりはじめたのが、昭和56年頃。父や祖父の世代では、年に1〜2度ぐらい

しか踊る機会がなく、一時活動も途絶えていたのですが、ちょうど私たちへと世代交代したのを機に活動を復活しました。獅子踊り自体は120年以上前から地元で伝わるもの。供養舞ではなく強い縛りがないので、神社の祭りやイベントなどどこでも踊れるんです。昔は遊びも少なかったのですが、こうした伝統芸能が農閑期の交流の場となり、農繁期に向けて助け合いの絆を深める意義もあったのでしよう。しかし今では、団体として発表する機会は年に1〜2回。花火大会という人が集まる場を有効に生かして、踊りを披露できるのは、踊る側にとっても励みになります。特に、子どもが参加する団体にとって発表の場は大事ですし、見てもらうことで参加への興味を促し、後継者集めにもつながると思います」。

来場者も運営サポーターの一人

大志田さんは10年程前から花火大



継続のために「1万発を維持してきた取り組みを広く知ってもらおうことも大事」と大志田さん

会の写真撮影も担当しており、一閑や水沢など他地域の花火を見る機会も多いそうですが、その中でも「盛岡花火の祭典」は、花火の質の高さを感じると思います。

「かつては、運営側が一軒ずつ歩いて寄付集めをやった時代もあります。大変だったけれど顔を合わせてお願いしたこと支援してくれる人も増えた。その積み重ねがあるからこそ、今がある」と大志田さん。今後続けていくうえでは、規模にこだわらず工夫していく必要があると話します。一方で、高橋さんからは、「1万発に拡大した先輩方の苦勞を想えば、規模を維持したいし、都南地区からなくせないという使命感がある」との声も。両者ともに運営スタッフとして愛着あつての思いです。

同大会では、観賞にあたって有料エリアを設け、入場券を購入して河川敷や土手西側に入場する形式をとっています。資材高騰のため今年是有料席等の料金改定をしています。入場券の前売りは金額を据え置いたままです。

「前売り券を買っていただくことで運営の支援となり、当日の混雑も緩和できるのではないかと思います。ぜひ、ご協力願いたい」と2人は声を揃えます。盛岡の夏を飾る1万発の感動を支えるのは、来場者一人ひとりであることを改めて感じます。